



# 近世中後期長崎代官高木氏について——長崎奉行との關係を踏まえて

戸 森 麻衣子

はじめに

近世中・後期の幕領や幕府代官に関する研究が、制度史・政策史から具体的な代官の性格や幕領支配の構造を明らかにする研究へ、幕令など中央から出された史料によった研究のみでなく地方の史料からくみ上げた議論へと進んでいる<sup>(1)</sup>。久留島浩氏らの研究史整理でもまとめられているとおりであり詳しくは述べないが、西沢氏はその中で、代官の分析を通じて幕政や幕領支配の動向を考察していく研究の進展があつたことを評価する一方、総体的な代官や特定の代官個人の性格や役割を論じた研究が少ないという課題を挙げている。村田路人氏<sup>(2)</sup>や藪田貫氏<sup>(4)</sup>の研究で明らかにされている大坂代官の堤奉行兼帯のように、代官は民政・徴税といった地方支配のほかに様々な役務を果たしていたが、一代官のもつ諸側面を総合的に分析する研究は少ないといえる<sup>(3)</sup>。また、幕政改革との関連で代官支配について明らかにする研究として西沢氏は、寛政改革期の代官所統制に関する柏村哲博氏<sup>(6)</sup>らの研究等を挙げた上で、地域別の個別研究を積み重ねて幕政改革期の代官の位置を総合的に論じていくことが必要だと述べ

ている。久留島氏は代官研究について、従来の研究は幕政改革論、とくに代官の「封建官僚」化の過程と関わらせて論じられてきたことを指摘した上で、なぜそのような官僚化が可能だったのか、在地側や代官所構成員の問題も含めて考察されていく必要があると述べている。寛政期の代官の「吏僚化」については、代官人事を刷新して新しい代官を登用したこと、手附制度を創始して幕臣を代官属吏に入れ、幕府の命令を下部まで貫徹させようとしたことなどを根拠にこれまで論じられてきた。<sup>(7)</sup> 寛政改革で関東郡代の伊奈氏は改易されたが、しかし同じ地付の代官であっても京都の小堀氏や本稿で取り上げる高木氏のように引き続き代官を勤め、代々代官として定着した家のあることも事実である。幕政の動向からのみではなく、こうした代々代官が「吏僚化」したのか、したとすればどのような形で「吏僚化」が進んだのか明らかにする必要がある。それによって幕領・代官改革の方向性をより深く理解することが出来るよう。

本稿で分析対象とする長崎代官は、遠国奉行長崎奉行の管轄する都市に拠点の陣屋を持ち、長崎周辺に展開する幕領村々を管轄する点にその領域支配の特徴があった。このようなことから長崎代官について考えるには長崎奉行との関係を踏まえることが不可欠と推測されるのだが、詳細が明らかになっているとは言いがたい。このような中、遠国奉行と幕府代官の関係を考える大きな手がかりを与えてくれるのが畿内における諸事例である。上方幕領支配については、慶長期の国奉行制や寛永期の上方八人衆・上方郡代体制、「支配国」を単位とした大坂奉行の広域行政権などが明らかにされてきたが、<sup>(8)</sup> そうじて享保期の「国分け」以前までの分析に偏っており、その体制が近世中後期にどのように展開したのか分析されないままであった。ところが最近、村田路人氏が享保改革期の上方支配機構の再編について研究を発表し、「支配国」の近世中後期におけるありようを明らかにする突破口を切り開いた。<sup>(9)</sup> 村田氏は、享保期に京都町奉行の上方代官統括機能が弱められ、上方八カ国代官と勘定所を直結させることによりかれらを中央統制の

もとに置こうとする動きがあったとする。そして「国分け」によって大坂町奉行の権限強化を行い、代官の京都町奉行や堺奉行との関係を大幅に変更して畿内近国地域の幕府支配体制の見直しが図られたと結論づける。また村田氏は、代官がある種の遠国奉行支配に携わっていたとも述べている。なお、明和・安永期における上方幕領支配の改革を取り扱った研究も小倉宗氏によって進められている。<sup>(10)</sup> 小倉氏は、大坂町奉行や京都町奉行の強い広域支配権のもとに置かれていた上方代官について、明和七年と安永九年令の二つの改革令によって上方代官の手限支配権の拡大がなされたこと、しかし京都町奉行「支配」代官の場合例外で、従来のままに置かれたことなどを明らかにしている。同じ頃、畿内と同様に長崎でも長崎奉行と長崎代官との関係の変化が見られたのか検討してみたい。

なお、近世中後期長崎代官高木氏についての本格的研究はほとんど皆無に近い。『長崎代官史料集』<sup>(11)</sup>「長崎代官手代控」<sup>(12)</sup>という、長崎代官に関する活字史料集が刊行されているにもかかわらず、これを素材とした研究はあまり見られない。長崎代官に関する先行研究としては森永種夫氏の『幕末の長崎』<sup>(13)</sup>があり、長崎代官支配の概略について述べられているが、著述の目的が長崎周辺地域の社会状況を明らかにすることに置かれているため、代官そのものについて詳しくはない。高木氏の履歴は『長崎略史』<sup>(14)</sup>にまとめられているが、踏み込んだ研究がなされているとは言い難い。長崎の対外貿易に関する研究は枚挙に暇がないほどであるが、奉行の支配権限と大きな関連を持って遂行されたと考えられる長崎代官の役務が明らかにされないままの状態にあるというのが長崎研究の現況である。

幕府にとって特別な位置づけを持たされ、特別な行政体制を備えた長崎という都市において幕府代官がどのような役割を果たしていたのか、この点から従来の長崎研究に欠けていた視角にアプローチし、他方、長崎代官のあり方から見出される全国の幕領支配や代官の動向との共通性を確認することによって、個別代官研究にとどまるのではなく代官論・幕領研究の深化に資したい。

【表1】長崎代官高木氏代々の略歴

名 前	没 年	代官勤役年	備 考
高木作右衛門忠興	～宝暦10年	元文4年～ 宝暦10年	元文4年：はじめて長崎代官となる。御用物方兼帯。
作右衛門忠興	～天明元年	宝暦10年～ 天明元年	天明元年：米方・寺社方兼帯
作右衛門忠任	～天保2年	天明元年～ 天保2年	文化2年：九州并中国筋依物札方唐紅毛抜荷取締兼帯 文政5年：切米150俵に足高。
作右衛門忠篤	～嘉永元年	天保2年～ 弘化3年	弘化元年：天草石本静馬事件により差控を命じられる 弘化3年：代官免職
健三郎忠顕	～嘉永2年	弘化3年～ 嘉永2年	
作右衛門忠知	～明治6年	嘉永2年～ 明治元年	嘉永2年：鉄砲方兼帯 明治元年：長崎府取締役

典拠：「長」316-13-144（明細書、先祖書の綴）から作成。

# I. 近世中後期長崎代官高木氏について

## 1. 高木作右衛門家について

まず、長崎代官高木作右衛門家について概要を述べておこう。

近世前期長崎代官末次氏が密貿易を企てたとの廉で延宝四年に断絶させられたのち、しばらく長崎代官は空席であったが、元文4年、それまで長崎町年寄筆頭であった高木作右衛門忠興が幕臣に取り立てられて長崎代官となった<sup>(15)</sup>。【表1】に近世中後期の歴代の長崎代官を挙げた。高木作右衛門忠興以来、元文四年から幕末まで六代にわたって高木氏が代々長崎代官をつとめることになる。全国に配置された代官や代官所役人の情報・構成が載る版行冊子「県令集覧」<sup>(16)</sup>をみると、長崎代官高木作右衛門の箇所には「代」の合印が記され、「代々御代官」のひとりであることがわかる。「代々御代官」にはほかに伊豆蒨山代官江川氏や京都代官の角倉氏、近江信楽代官の多羅尾氏などがいるが、近世前期より代官を勤めていた

他家に比べると高木氏の代官としての履歴は短い。高木氏は忠與以降代々代官役を世襲していくが、作右衛門忠篤の代に幕府より代官役を免じられ隠居させられることがあった。これは、弘化元年に起こった肥後国天草郡の勘定所御用達石本靜馬身分に関する事件によつての処罰である。<sup>(17)</sup>

長崎代官の特異点は、代官として、幕臣として幕府から高一〇〇俵を受け取つていながら、ほかに長崎地役人筆頭として長崎貿易利銀のうちより受用銀六〇貫五〇〇目<sup>(18)</sup>を受け取つてゐることである。すなわち幕臣Ⅱ代官であり、同時に長崎地役人であるという二重の身分規定を受けてゐるということができる。高木家は長崎住居を認められてゐるが、下谷御徒町のちに湯島手代町に江戸役所を構えていた。拝領屋敷は青山権田原に持ったが、そのような郊外の屋敷地では御用向に不便との判断からか下谷・湯島界隈の屋敷地を借り受けて江戸役所としてゐる。なお屋敷拝領は天保五年であるが、それ以前から江戸役所は置いていた。

## 2. 高木氏の幕領支配

次に、長崎代官高木氏の支配幕領の範囲について見てゆきたい。長崎代官の支配地は前期長崎代官の時代より長崎附（郷方）三カ村と称される三カ村―長崎村、浦上山里村、浦上淵村<sup>(19)</sup>が基本であつた。元文四年に作右衛門忠與が長崎代官に就役したときの支配領域も長崎附三カ村のみであつた。すなわち長崎代官の鄉村支配は長崎奉行の管轄する都市長崎に隣接する郷方域を主としたものであることが分かる。全国の遠国奉行管轄地をみると、例えば佐渡奉行の場合のように広域にわたつて奉行が管轄する場合と、大坂のように市中のみ大坂町奉行の管轄で、隣接する鄉村は代官が支配する場合とに大別できる。長崎の場合は後者の型に属するといえる。【表2】は代官高木氏の支配地・支配高について把握し得た分のみまとめたものである。当初は長崎附三カ村の合計四〇〇〇石程度の領域しか管轄してい

【表2】長崎代官高木氏の支配幕領の変化

代官名前	年代	支配幕領に関する履歴	支配幕領高 (預所を除く)
忠 興	元文4年	代官就役。長崎附三ヵ村の支配代官となる。	4000石余
忠 興	宝暦10年	代官就役	(4000)
	明和5年	長崎最寄彼杵郡・高来郡2000石余御預所	
	安永4年	長崎最寄彼杵郡・高来郡2000石余御代官所へ	6900石余
忠 任	天明元年	代官就役	(7000)
	寛政11年	1万石増地 (肥前国松浦郡)	(17000)
	文化7年	1万石増地	(27000)
	文化9年	肥後国天草郡・八代郡23000石余当分預所	
	文化13年	日向国7000石余当分預所	
	文政2年	肥後国16000石余御代官所へ	(43000)
	文政11年	肥前国7000石当分預所 (日向国預所は西国郡代へ)	
	文政13年	1万石増地	
忠 篤	天保2年	代官就役	(7000)
	天保3年	1万石増地	(17000)
	天保3年	肥後国天草郡・八代郡24000石余当分預所	
	天保4年	筑前国怡土郡4000石別廉当分預所	
	天保6年	1万石増地	(27000)
	天保6年	豊後豊前日向国11万石当分預所	
忠 顕	弘化3年	代官就役	(7000)
忠 知	嘉永2年	代官就役	(7000)
	文久元年	西国郡代元支配所16万石当分預所	
	元治元年	松浦郡1000石を管す。	

註：支配幕領高の（ ）内はおおよその推定値。

典拠：忠篤までは「長」316-13-144「明細書」。忠顕・忠知は『長崎略史』による。

なかったが、忠興の代以降になると次々と支配地の増地を受けるようになる。安永四年に加えられたのが彼杵郡・高来郡七カ村（古賀村・日見村・茂木村・川原村・高浜村・杵島村・野母村）、三〇〇〇石程の支配地である。これらの村はいずれも長崎半島に位置し、長崎警衛や抜荷取締を行うには欠かせない重要地点にある。また、物資や商人・奉公人が長崎との間を行き来する長崎の経済統制上においても重要な村々で、都市長崎の地回りの性格をもった村であるといえよう。三代目作右衛門忠任の代にはさらに支配地が拡大された。寛政一年に松浦郡幕領一万石が加えられ、文化七年一万石増地、文政二年には肥後国天草郡幕領一六〇〇〇石が加えられ、文政一三年にはさらに一万石の増地となった。忠任期の最後には、長崎附三カ村、彼杵郡・高来郡「七カ村」、その他松浦郡、肥後国天草郡、筑前国怡土郡の代官所・当分預所をあわせ支配地は合計四万三〇〇〇石余にも及んだ。<sup>(20)</sup>しかし、忠顕以降支配地は長崎附三カ村と「長崎七カ村」の合計約七〇〇〇石余に戻り、一時預所幕領を管轄するものの、元治元年段階で長崎附三カ村四四七六石、彼杵郡・高来郡七カ村三一八二石の計七六五八石と松浦郡幕領一〇五八石を管轄する代官として維新を迎えた。寛政一年に松浦郡幕領を増地されてからのちは、長崎近隣の鄉村支配のみでなく、他の幕府代官同様に広域幕領を管轄する形に転じたといえよう。はじめに触れたように寛政改革期の幕領改革によって大規模な郡代・代官の処分や刷新が行われ、新たに有能な代官を登用し在陣させて地方行政に当らせ、寛政改革の農村政策を実行させた。これらの動向と代官高木氏が長崎よりはなれた幕領の支配を任せられるようになったことには関連があるように思われる。いうなれば代官「吏僚化」の過程で代官の性質を均すということが行われたのではないだろうか。高木に対し他の幕府代官同様に万石単位の地域支配を行わせることと引き換えに、他の代官の方式に準じた幕領支配の導入がはかられたのではないかと推測される。一方、支配所増地は代官の勤功に対する付与という性格も帯びており、その観点から作右衛門忠任と幕府、勘定所の関係を検討する必要があるだろう。忠任は文化二年から九州・中国筋の



浦々俵物糺方御用・唐紅毛拔荷取締御用を西国郡代羽倉権九郎と共に勤め、検見ついでに最寄私領浦々まで廻浦を行ったりし、また文化四年には近隣藩領の城詰米・領邑困穀の見分に出向き、文化五年のフェートン号事件では適切な対応をとったとして幕府に誉められている。<sup>(21)</sup> こうした地方支配に限定されない高木氏の勤役の展開と支配地の増地は連関していたと考えられる。なお、弘化期以後幕末まで支配地が基本的に長崎附三カ村と「長崎七カ村」に限定されたままであったのは、外国船のたび重なる来航や長崎開港により代官の役務が複雑化したため、それらの問題に専念させたためと見ることが出来る。

長崎代官は、長崎奉行所(立山役所)や長崎会所にごく近い長崎市中勝山町に代官役所を置き、奉行所や長崎会所と連絡を密にしながらい支配事務を執った。長崎附三カ村は長崎奉行支配地ではないが、長崎奉行の町触が市中と同時に触れられる郷村であり、市中並の扱いを受ける場合もあった。三カ村は代官所地元村として門松献上など代官所御用をを果たしていた<sup>(22)</sup>ほか、外国船出入の際や長崎奉行入崎・出崎の際に人馬を差出し、浦上刈村では水主御用を勤めるなど、「郷方」三カ村は長崎町人とは異なる分野で長崎に関する役を勤めていた。「七カ村」には浦見番などの地役人も居り、異国船の監視や漂流船の発見に従事していた。長崎代官は、貿易都市としての長崎の維持に関する諸役を「郷方」三カ村や「七カ村」に賦課し徴発したほか、一般の代官同様に幕令や長崎奉行所の触を達し、年貢の徴収などの郷村支配も行っていた。代官高木支配地の年貢は基本的に長崎廻米<sup>(23)</sup>された。長崎には幕府の御米蔵があり、高木支配幕領の年貢米のほか、西国郡代管轄幕領や諸藩の預所幕領の年貢米も廻米されて納められた。長崎御蔵は代官支配地の長崎村船津郷に所在し、御蔵の管理は長崎代官の管轄であった。年貢銀は長崎会所に納められ、大坂御金蔵との間に為替取組がなされた。また、支配地で発生した犯罪事件や公事出入の処理にも長崎代官はあたった。なお裁判権の問題については長崎奉行と長崎代官の相互関係を考える上で鍵になる事項なので、第三章で詳述する予定である。

## 〈小括〉

元文期に町年寄筆頭から長崎代官に取り立てられた高木氏は代々代官役を勤める代官となった。はじめ「郷方」三カ村と呼ばれる長崎隣接村落を管轄していたが、代を重ねるに従い支配地の増地を受け、また当分預所幕領も預かるようになった。管轄地は肥前国のみでなく肥後国・筑前国などにも展開した。支配領域の変化は、代官高木を他の代官並に変えようとする江戸方の意向によるものであったと考えている。

## Ⅱ．長崎代官高木氏の諸役務

代官は村方からの年貢徴収など地方支配を担当するのが主要な役務であるが、そのみでなく様々な兼帯役を負っており、その兼帯役が各地の代官や代官所支配を特徴ならしめている。「県令集覧」を概観しても兼帯役を持たない代官のほうが少ない。天保一三年時点の事例を挙げると、支配領内の鉾山を管轄するもの（石見代官、生野代官ほか）、大河川の堤川除や河川交通を管轄する代官（利根川の水行取締掛兼帯関東代官、堤奉行大坂廻船役兼帯の大坂代官）、貫目改役所などを預かり、交通・経済統制を担当する代官（品川・千住などに設けられた貫目改役所を管轄する関東代官など）、そして幕府の御蔵管理を担当する代官（日光今市御蔵掛兼帯関東代官、甲府御蔵掛の甲府代官、駿府御蔵掛の駿府代官など）がある。特殊な役割をはたす代官としては、禁裏御所方御用を担当する京都代官の小堀氏や大津町奉行を兼帯する近江大津代官石原氏などがある。長崎代官高木氏もこれらの例に漏れない。【史料1】は、代官高木栄太郎忠篤が倅健三郎を連れて江戸に参府するにさいし、留守中の代官所御用向取計方について長崎奉行に伺っ

た内容を示す史料である。

【史料1】<sup>24)</sup>

私参府留主中御用向取計方伺書

私儀倅健三郎召連此度参府仕候ニ付、留主中御用向取計方は迄亡父作右衛門参府并廻村留主中伺濟取計候振合ニ准シ左ニ奉伺候

- 一、御代官所当分御預所村々公事訴訟申出候内、私帰着迄差延不差支願筋者理解申聞差延シ、差懸り候願筋者吟味仕、市中或ハ私領拘り合有之分者例之通取計、御奉行所御吟味之儀申上一件差出候様可仕候、(中略) (A)
- 一、出火・変死・喧嘩・口論等有之節者先御届申上、他支配・私領引合坏有之分者例之通先方江掛合、手附・手代差出見分吟味為仕奉伺候様可仕候事 (B)

一、(中略)

- 一、御代官所当分預所当辰年御勘定組諸伺書・御成箇郷帳等、当春来春ニ至可差出分、且諸国御廻米納札并御代官所当分御預所諸入用米銀請取手形等私調印仕置、其時々御奥印・御裏印之儀申上、例之通取計候様可仕奉存候事 (C)

一、(中略)

- 一、唐船漂着、汐繫等有之候節者先御届申上、早速手附・手代差遣、仕来之通取計候様可仕候事 (D)
- 一、当冬唐船入津之上御用他之品持渡候ハ、例之通御断書差出請込、其外商売内方請取可申分者荷渡之節引分請込方之儀、例之振合を以時々申上請込候様可仕候事 (E)

- 一、右御用物請込候品々定例之通選調為仕候上、調進方固割書付差上、御認之節者元々手附手代差出御箱詰可仕

候事 (F)

一、御用物入目録之儀者出府ニ付無印与肩書ニ相認差上候様可仕候事 (G)

一、寺社諸願・附鰭伺之儀、元メ手附・手代名前小印ニ而相伺、私婦着之上増印可仕候事 (H)

一、寺社年始御礼其外臨時入院御礼等相勤候節者、御広間ニ手附手代為相詰候様可仕候事 (I)

一、支配役之もの養子・退役・相続・跡抱入或者湯治旅行願等之儀、不差急分者成丈婦着之上可奉伺候得共、難差延子細有之節者、例之振合を以相伺候様可仕候事 (J)

一、御用物藏・御米藏・御武具藏・御塩硝藏戸前私実印封相用候分者、印紙元メ手附手代江相渡置、時々相用候様可仕候事 (K)

一、瀬崎御米藏御廻米納并御切米御扶持方其外諸出方等、元メ手附・手代差出、定例之通納払可仕候事 (L)

一、(二カ条中略)

一、漂着朝鮮人諸雜用請取手形御裏判相濟、対州聞役と差出候ハ、例之通銀出方之儀申上候様可仕候事 (M)

一、御林木榎木願并風折・立枯等申出候節者、例之通手附手代差遣見分吟味為仕奉伺候様可仕候事 (N)

一、市中築地空地架造願、年番町年寄申上御下御座候ハ、例之通手附・手代差遣見分吟味為仕奉伺候様可仕候

事 (O)

(中略)

(天保3) 辰十一月 二日差出

高木栄太郎

[書面伺之通可被取計候

【史料1】から当時の長崎代官高木氏の役務のおおよそがわかる。まとめると①地方支配(年貢徴収、法令順達、警

察・裁判関係など前章で述べた内容) (A、B、C、N)、②長崎代官の管轄する地役人(「支配役」と称する)の支配(「J」、③輸入品のうち幕府に献上される品物に関する差配(御用物方) (E、F、G、K) ④長崎市中・「郷方」三カ村の寺社の支配(寺社方) (H、I)、⑤長崎幕府御蔵の管理と都市長崎の糧米の調整(御米方) (K、L)、⑥長崎市中の空地・埋立地等の把握(O)、⑧漂流人関係の事項(D、M)となる。ここで前掲の【表1】に戻って備考欄から諸役兼帯の時期を確認していきたい。高木作右衛門家は長崎代官となる前、すなわち町年寄であった時代から御用物方役を勤めていた。代官就役後も御用物方を継続して勤め、天明元年になると御米方、寺社方を兼帯することになる。さらに文化三年には抜荷取締掛を兼帯する。なお、嘉永二年になると鉄砲方を兼帯するところがあるが、これはもともと鉄砲方を勤めていた代官作右衛門忠頭の弟高木定四郎が兄の跡を継いで代官となったために、一時期代官が鉄砲方を兼帯するようになったためである。通常は代官の弟筋の家が長崎鉄砲方を勤めていた。<sup>(25)</sup>以下、【史料1】の内容等に拠りながらこれらの兼帯役を順に説明していく。

#### A 「支配役」(地役人)の支配

最初に「支配役」の支配について述べる。長崎の地役人に関する研究は、地役人全体の組織関係を明らかにしようとするもの、<sup>(26)</sup>阿蘭陀通詞や唐通事など特定の地役人について詳細を明らかにしようとするものなどがでているが、地役人の筆頭の格式にあるにもかかわらず、こと長崎代官については、地役人の中での代官の位置、役割について言及したものは見受けられない。長崎地役人はその役務の内容から①番方②町方③唐方④蘭方⑤御用物方・長崎会所、に大きく分けられると先行研究では整理されているが、この役務の大別とは対応しない形で長崎奉行支配地役人、長崎代官支配地役人、町年寄支配地役人とに身分支配は分けられている。「支配役」にたいして代官は、長崎奉行所から連絡を受けて触の廻達を行ったり、相続等の願書を受け取ったりしている【史料1】(「J」)。なお長崎代官「支配役」

【表3】長崎代官の「支配役」

①	長崎村浦上村庄屋
②	御船船頭并御水主
③	浦見番
④	瀬崎御蔵預并南瀬崎御蔵番、北瀬崎御蔵番、北瀬崎御蔵外廻番、御米蔵筆者、米見、舁取、南北瀬崎小使、御米方附筆者
⑤	御用物御武具御蔵預、御用物指物吟味役、御用物御蔵番、御武具蔵番、御時計師、御目鏡師、御漬物師、御漬物師手伝、指物師、縄屋、表具師、張付師、玉屋、鋳師、銀屋、彫物師、御用物荷造、
⑥	書物改役(向井元仲)、書記役、書物改手伝、能太夫并役者、御薬園掛薬種目利、御薬園掛薬種目利手伝
⑦	立山御役所裏廻番、同所水番

典拠：「長」19-1-1-7-2「金井八朗翁備考録」七（下）。

は、【表3】のようにまとめられる。①のグループは代官支配幕領の村役人で、地役人として受用銀を得ているものである。すでに述べたように「郷方」三カ村は長崎に対して諸役を勤める村柄であり、その役負担の場面で先頭立って人足を率いる三カ村村役人は、市中町々で町人足の手当てにあたる町乙名や組頭（これらも地役人として受用銀を得ている）同様の役割を果たしており、地役人とされているのも当然といえる。三カ村は代官支配地であるために、村役人である地役人の「支配」も代官が担当したと見ることが出来る。次に②のグループだが、これは代官が船手方を管轄していたことの証左である。例えば不時の異国船入港があったとき長崎代官は、浦上測村の漁民とその持ち船をも動員して海上警備を行った。御船蔵が長崎村船津郷に位置すること、長崎湾に面して長い海岸線を有し、海上警備の上で要衝となっており浦上測村が長崎代官支配に属することと関連していると考えられる。長崎警備は周知のように福岡藩、佐賀藩が隔年で行っていたが、その指揮は長崎奉行所からのみ発せられたのではなく、特に海上の問題については長崎代官が深く関わっていたと推測される。③は②の海上警備の問題と関係し、指定の浦見番所から異国船の

来航などを監視する役である。浦見番所は彼杵郡・高来郡の「七ヵ村」にあり、浦見番の給銀や筆墨紙代などの諸入用は高木方から渡された。<sup>(28)</sup> 次の④のグループについては代官の御米方掛の役務について後述する中で説明したい。⑤は同様に御用方掛の項で述べたい。⑥の書物改、能太夫などがなぜ代官の「支配」役であるのか、という点の説明が難しい。書物改の向井氏は市中伊勢町にある中嶋聖堂の祭主であるが、後に述べるように長崎代官は長崎市中と「郷方」三ヵ村の寺社支配、宗教者身分支配を担当しており、このつながりによるものかもしれない。また、御用書籍の改に向井氏は関与するので、その事情によるとも考えられる。⑦のグループは奉行所廻りの山林や水道の管理をおこなう者で、奉行所が長崎村岩原郷に位置することから代官の管轄とされたのであろう。

なお、書物改、御船頭并御水主、御用物御武具御蔵預、瀬崎御蔵預并南瀬崎御蔵番については踏絵宗門人別帳を高木方で管理し、高木方から宗門人別手形を奉行所に提出している。<sup>(29)</sup> しかし書記役・書物改手伝・御用物指物吟味役・御用物御蔵番などは居町で人別を把握し、人別帳は町方から提出することになっており、高木の人別支配は間接的であった。また、長崎村浦上村庄屋などは村方人別となるので代官高木方で人別を把握していた。このように「支配役」の中にも「支配」の内容の相違が含まれていた。

#### B 御用物方

次に御用物方役であるが、これは高木氏の職掌として特に重要な位置にある。御用物方は先述したように高木氏が元文期に長崎代官となる以前から町年寄筆頭として勤めていた役で、それを代官となっても引き継いだものと理解できる。御用物として白糸・反物・砂糖・薬種・鮫皮・伽羅・麝香・書物などが幕府に調進されていた。その手配や品物の改めを行っていたのが御用物方手代や御用物方に所属する地役人であり、【表3】の⑤にあたる。このうち御用物御武具蔵預は名の通り御用物蔵の管理者であり、指物師や眼鏡師などの職人は御用物の細工に関わる者であったと

推測される。御用物方の事務は長崎代官手代四名が兼帯して執っており、この役務に対しても地役人として受用銀が支給されていた。<sup>(30)</sup>

御用物方の職掌に関して高木氏は、長崎奉行へ一々伺いを立てて役務を遂行している。このように御用物方の役務が奉行の管下にある理由ははつきりしている。御用物方は、高木氏が町年寄時代から勤めてきた役であり、すなわち代官につく役ではなく長崎奉行「支配」の地役のひとつである性格づけられるからである。御用物方手代が、代官高木のもとで幕領支配を担当する場面では代官手代であるが、御用物方の役を果たしている場面では御用物方手代として働き、それに対して長崎貿易利銀より給分を受けているのに対応している。つまり高木氏も、御用物を取り扱う場面では、代官＝幕臣でありながら地役人の一人として働いているということになる。以下に御用物方の職掌に関する史料を一点挙げる。

【史料2】<sup>31)</sup>

御差御用ニ可相成御柄鮫追々御用立御貯甚御手薄相成候間、年々定式御用当秋御調進式拾本之内江、御差ニ可相成極上之御柄鮫御差加御調進有之候様致度、此段及御掛合候以上、

正月

御腰物奉行

下ヶ札「御書面之趣致承知候、長崎表江可申遣候、此段及挨拶候

丑正月

(在府長崎奉行)  
牧志摩守」

近來致調進候鮫証合不宜御差御用ニ不相成候間、以来上品之分調進方等之儀二付阿 伊勢守殿御別紙之通被仰渡候旨江府方到来二付、写相渡候条被得其意精々入念撰立可被致調進候

「嘉永六」丑六月 「六日大沢豊後守殿御達」  
(朱筆) (在勤長崎奉行)



【史料2】にあるように、御用物の調達に対しては幕府の御腰物奉行や賄番、御納戸方などが対応することになるのだが、高木氏はこれらの江戸の奉行衆と直接に書類を往復できる立場になく、長崎奉行がかわって江戸の奉行衆と掛け合いを行い、その結果を高木方に達する形式をとった。代官としてならば勘定所奉行をおして掛合を行うであろう御腰物奉行らに対して、御用物方の役務を勤めている場面では、高木氏は幕臣<sup>11</sup>代官ではなく御用物方掛地役人として扱われることになるといえよう。

### C 寺社方

次に寺社方の管掌について説明する。天明期より市中、郷中を問わず長崎の寺社は長崎代官の管轄下にあった。なお、長崎の主要寺社は市中のうちにはなく、長崎村伊良林郷や西山郷、岩原郷に集中している。例えば長崎の総鎮守諏訪神社は西山郷にあり、徳川將軍家の御霊屋のある安禪寺も西山郷である。郷地に寺社が集中しているのは、火災や町域の拡大に伴う町割の変更に伴い、寺社を市外に移転させたためといわれる。このような事情から寺社管轄は市中、郷方の区別なく行うことが求められたといえよう。寺社方掛の役務の主な内容は、神職・僧侶の人別調査、寺社地・朱印地の把握、長崎奉行に対する寺社の節句御礼の取次ぎなどである。なお、神職・僧侶のみでなく、虚無僧・座頭・盲僧・陰陽師の「支配」も高木氏の管轄であった。天明期段階における寺社方の管掌を箇条書きにした史料の内容を挙げると、まず①寺社山伏宗門人別帳に本末目録を添え、長崎奉行に提出すること、②寺社諸願、座頭仲間等依頼にて長崎会所から銀出が行われる場合には、先例を確認したうえで長崎奉行に伺を出し、聞済の上で銀出方を手配する。③寺社・朱印地の他行往来切手は、長崎市中寺社についても代官所支配幕領寺社同様に発行して渡す、④寺社の願い出によって、芝居・浄瑠璃会等を郷地等で興行する場合には、長崎奉行に伺いを立てて許可を受けた上で行う。以上のようにあるが、代官が寺社方を管掌するといっても長崎奉行の指示を受ける場面は多い。次に挙げる【表

【表4】 寺社から代官高木へ提出する願書・届出書〈寛政期〉

	願・届
①	説法願
②	定念仏回向届
③	諸堂社普請願并御届書
④	旅僧逗留月延願
⑤	本尊開帳他所より出開帳并臨時法会の儀願、市中建札願
⑥	寺社境内立木立枯等相成伐取度願
⑦	諸寺院町方人別のもの弟子ニ貫請度旨願、願相済貫請度為仕法名ニ相改候儀御届書
⑧	諸社堂例年定式祭礼の儀御届書

典拠：「長」19-1-1-6-1「金井八朗翁備考録」六（上）。

4】は、寛政期における、寺社から代官高木氏に提出する願書・届出書の種類をまとめたものである。この表の③と⑤の建札の件については代官方で承置くのみの措置で済むことになっているが、そのほかの件では高木方の手限で判断、指示することは出来ず、さらに長崎奉行への伺・届を要することになる。また代官に寺社の仕置権はなく、犯罪を犯した僧侶・神職身分の者の処置は長崎奉行にゆだねた。すなわち、代官の寺社方の管掌は基本的に長崎奉行の監督下にあり、役務は寺社に關係する書類の受領や奉行への諸願提出の取次ぎなど管理事務に属する事柄であったことがわかる。

長崎代官高木氏が寺社方を管掌する以前は、町年寄の一人が寺社方掛を兼帯して同様の役割を負っていた。しかし、天明元年以後は代官の兼帯役に引き上げられた。御用物方・御米方を含め、このような町年寄から代官への職掌移管は、長崎地役人の身分やその役務に対する幕府の認識変化を反映していると考えられる。御用物方・御米方・寺社方というかつて町年寄が勤めていた兼帯役が長崎代官の役とされたことは、ひとつには、地役人筆頭の席が元文期を境に町年寄から長崎代官とかわったことに連動し、地役人筆頭が果たす役という理由で代官の兼帯役となったという見方がある。もうひとつは、長崎地役人の権限を制限し、長崎代官という幕臣や幕府から派遣される長崎奉行所役人に行政の主導権を移そうとした動向の現われと見ることもできよう。私は前者

【表5-1】寛政4年における長崎廻米

産地	廻漕元	数量
肥前米	高木菊次郎 (長崎代官)	1000石余
肥後 (天草) 米	松平主殿頭 (島原藩) 御預所	7000石余
豊後米	揖斐造酒助 (西国郡代)	14000石余
石見米	菅谷弥五郎 (石見大森代官)	4000石余

典拠：「長」19-1-1-6-3「金井八朗翁備考録」六 (下)。

の理由によるよりむしろ、後者の評価の方が適當ではないかと思っている。本稿では地役人制度そのものについて論じる紙幅がないので詳しくは述べられないが、長崎の地役人制度は、阿蘭陀通詞・唐通事など他に替えられない特別な職能を持つ地役人は別として、長崎会所役人が貿易を取り仕切り、町年寄や町乙名がいわば「自治的」に長崎の町政を担う体制は否定されていく傾向にあるのではないか。かわって幕臣である長崎代官や長崎奉行、江戸から下向し

てくる御勘定・勘定吟味役・目付などが各方面の地役人を指揮し、江戸方の意思を直接反映させることを容易とする体制に変革しようとしていくのではないかと考えている。その画期は天明から寛政期頃にあると推測している。<sup>33)</sup>

#### D 御米方掛

つづいて長崎代官の御米方掛の管掌について述べたい。御米方掛も寺社方同様に以前町年寄が勤めていた掛を、天明元年になって代官の掛に移管した役である。さきに触れたように、代官が遠国奉行支配地に所在する幕府御米蔵の管理を担当する事例は外にも存在する。次に挙げる【表5】は長崎御蔵への入米と出米の内訳を示したもので、【表5-1】にあるように長崎御蔵へは九州・中国筋の幕領米、預所幕領米が廻漕されている。瀬崎御蔵に納められた年貢米は【表5-2】にみるように、長崎代官ら幕府役人・地役人の切米・扶持米にあてられ、奉行所諸入用米、代官所諸入用米、地下役人寺社拝借米、長崎会所飯米などに使われた。<sup>34)</sup> また、新しい年貢米が各地より廻漕されてきて古年貢米と入れ替えられると、古米は町方に払い下げられ、都市で消費された。払米は市中の指定の米屋参加による入札を行って払

【表5-2】天明4年における渡方の内訳

用途	数量
諸向御切扶持米	2280石程
諸向御貸米	13850石程
唐人粮米	1000石程
会所飯米	200石
諸向御扶持御助成御救米	1040石
定式御払	4400石
諸渡方欠米	500石程

典拠：「長」11-2-1「御米方寺社方辰御用留」。

なく、地役人がそれになった。御米方の役務については、当初は長崎奉行の指揮のもと町年寄が勤めていたことから長崎奉行支配であったと考えられるが、文化期頃に高木作右衛門は長崎瀬崎御蔵の取計についての伺を直接勘定所へ宛てて提出しており、このころには長崎奉行の管轄に属すのではなく、大坂蔵奉行同様、勘定奉行に直結する形をとっていたと考えられる<sup>(35)</sup>。この点は寺社方の管掌と異なるといえよう。

年貢米蔵納までの過程をみれば、日田の西国郡代をはじめ諸国代官、預所役所との密な連絡が不可欠であり、その点で通常から諸国代官と連絡関係の頻繁な長崎代官が幕府御蔵の掛を担当する利点はあったと思われる。しかし、出米に関する事項となると話は違ってくる。市中への払米の指示を行うということは、長崎奉行の管轄する市政に関与

い下げられるのだが、入札の手続きは米方手代が主に担当した。粮米不足の年には諸向御貸米の内より臨時払米も行われた。この米方手代も長崎代官手代のうちの二人が兼帯するもので、やはり地役人の役とされ、貿易利銀から受用銀が支給される。米方手代の場合においても、長崎代官から手代給が渡される他に地役人としての給分を受け取っているのである。御米蔵には御蔵預や御蔵番など御蔵を管理する代官「支配」地役人が配置されており、彼等が毎日御蔵に詰めて日々の出納管理は担当している。米方手代の役務は、蔵納米の把握、払米の会計処理、御蔵元払勘定目録の作成など全体を統括する部分であったと考えられる（史料1）<sup>(1)</sup>。なお、大坂御米蔵では勘定奉行支配の大坂蔵奉行や

することであるともいえるからである。長崎は糧米不足がおりやすい都市で、御蔵払米や他国産米に大きく依存していた。御蔵払米は安価で払い下げられたので、下層民救恤の役割も果たした。また、代官支配の「郷方」三カ村の年貢米は、毎年秋、瀬崎御蔵に納入される以前、村の郷蔵に納められた段階で、市中・郷中役人による拝借がなされている。市中では地役人個人の借用が多く、郷中は三カ村庄屋による三〇〇俵から七〇〇俵にも及ぶ拝借がなされていて、これは庄屋個人の借用ではなく村借であったと考えられる。<sup>(36)</sup>これは糧米が不足しがちな都市事情への対応と考えられ、このケースにおいても代官所は大きな役割を果たしていた。次にあげる史料も代官高木の長崎都市行政への関与を示すものである。

【史料3】<sup>(37)</sup>

市中外町并内町之内九町江廻穀出金申付度儀申上候書付

近年米価下直二而世上一同難儀之趣相聞候間、追々御廻粉御買上米も被仰付候間、御国恩を以身元相応之もの共者可及力程ハ米粉之内ニ而相廻、右置場差支銘々手前江難廻置分ハ金ニ而成共其支配々江可差出候、右を以公儀ニ而御買上米之内江可被差加候（中略）、私御代官所村々之内身元相応之もの共ハ勿論、小身之ものニ候共志有之候もの共江者身分相応之身元相□等申付候積ニ御座候、然ル處市中外町五拾四町者地子銀年々私方江取立并内町之内も九町者ヶ所除築地之地子銀是亦年々私方江取立、大坂御金蔵江上納仕来候ニ付、右外町五拾四町内町之内九町者入作之ものニ准廻穀出金申付候様仕度奉存候、此段御聞濟被成下候ハ、町方之もの多人数私方江呼出候も如何ニ付、町々乙名共方ニ而身元相札、御趣意行届身元相応ニ廻穀出金高名前耆人別半紙帳面ニ仕立、頭取乙名共方江取集、来月五日頃迄ニ私方江差出可申旨頭取乙名江被仰渡被下候様仕度奉存候、依之御勘定所より被仰渡書写相添此段申上候、以上

(文化4年) 卯正月

高木作右衛門

【史料3】をみると代官高木は、勘定奉行仰渡書に拠りながら町方域からの囲穀の取立を、支配幕領への入作人並の基準で行うことを主張し、市中における囲米政策について奉行に意見書を提出して積極的に都市糧米問題に関与していることがわかる。ここから長崎の都市糧米政策は、長崎奉行と長崎代官の共同で行われたと評価できるのではないだろうか。

Eその他

ほかに代官が勤めた役務に長崎市中の空地、築地、架造の把握・管理がある。都市長崎は、元龜二年の開港時に置かれた六町から発展した内町二六カ町と、その後内町の外縁部に開かれた外町五四カ町とからなる。内町は秀吉によって直轄化された際地子免除の朱印状が下され、以来高請されず、全面的に除地となった。外町は延宝四年に検地が行われて市域として固定されたが、地子免除にはならなかった。<sup>(38)</sup>このように長崎成立の過程による事情で外町のみが町屋敷分八三四石として年貢地となったのである。この外町の地代銀は代官が徴収している。外町では、地面の上に建っている建物や居住する人間に関することは長崎奉行の管轄であるが、こと地所に関することは長崎代官の担当なのである。<sup>(39)</sup>このような両支配の形態は長崎のみならず、江戸周縁部等においてもみられる。なお、内町でも築地などのちに開発された土地は年貢地とされた。地所の管轄が長崎代官であったために、空地や埋立地、河岸地の把握・管理も長崎代官の担当とされたものと考えられる。なお、宝暦期頃には築地・空地・架造願書をまず町年寄に宛てて提出していた。町方の者が空地や埋立地、河岸地のことのみ代官所へ願書を届け、吟味を受けることに疑問を感じていたためである。しかし、代官の意向もあつて文政期にはもとに復されている。<sup>(40)</sup>この一連の動向から、文政期頃には町年寄を通ずるのをやめて代官方による市中空地・埋立地・河岸地の一元把握強化を図っていたことが分かる。

また、【史料1】には示されていないが、代官支配幕領郷村のみでなく市中の営業者も含めて、諸冥加銀の徴収や江戸勘定所への年季引継伺は長崎代官の担当とされた。長崎市中から納められている冥加・運上には酒造冥加永、油絞冥加、船運上、髪結冥加永などがあつた。勘定所酒造方より高木の江戸役所の者へ渡された鑑札のうち長崎市中の分については、高木方から奉行所へ差し出され、奉行から酒造人に交付された。<sup>(41)</sup>酒造鑑札の発行までの手続きは代官高木が勘定所と直接やり取りしたが、鑑札の交付は町役人を通して行う都合から、奉行に依頼したものと考えられる。このように見ると、基本的に長崎市中の年貢・諸役（小物成、運上、冥加など）の徴収や取調に関わることは長崎代官の管轄であつたと考えることが出来よう。ただし、全面的に代官が扱っていた訳ではなく、町政機構を通す必要のある事項については長崎奉行が関与する場面もあつたことに留意する必要がある。

なお、【史料1】にあるように長崎代官は唐漂流人のことも管掌したが、紙幅の都合上説明は省略したい。漂流船の処理や浦見番所の支配、「長崎七カ村」の地方支配と関連する職掌として代官高木氏は抜荷取締にも従事していたが、この詳細についても今後の課題としたい。

### 〈小括〉

高木氏は、代官として管轄幕領の地方支配にあたっていたほかに、種々特徴的な兼帯役を負っていた。元文期の代官就役当初から、町年寄時代に勤めていた御用物方は引き続き兼帯していたが、その後、寺社方掛や御米方掛も兼帯するようになった。これらはいずれも町年寄が勤めていた役儀であり、町年寄からこれらの役儀を引き離して代官に勤めさせるということは、町年寄をはじめとする地役人が都市行政全般を請け負っていた体制を交換しようとするものであつたと考えられる。ほかにも抜荷取締や長崎防備に高木氏を動員し、また一部地役人の「支配」を任せるなど、幕臣である代官に奉行所行政の一部を分割し、長崎奉行の共同統治者として位置づけようという意図が存在したと考

えられる。遠国奉行を頂点とする組織によつて一定の地域内で完結する支配体制を改め、地付役人の権限を抑制し、幕臣や幕府派遣の役人を遠国地の支配集団に取り入れて幕府（江戸）直結型の支配体制へと変革を進めた様相が、長崎代官の事例から垣間見られる。

### Ⅲ、長崎代官と長崎奉行の相互関係

#### 1. 長崎代官の地方支配と長崎奉行

本章では、代官高木氏の長崎奉行に対する届出や伺の分析を通じて、長崎奉行と長崎代官の関係について考えてみたい。全国的に幕府代官が手限で判断できる事項は非常に限定されており、一々勘定所へ伺いを立てるのが普通であったが、代官高木作右衛門の場合、まず長崎奉行の指示を受けて懸案を処理した。また、さきの章で触れたように、代官の管掌とされる事項でも場面によつて長崎奉行の関与が見られた。勘定所ではなく長崎奉行にまず伺を立てるのは、代官が長崎奉行「支配」代官であることによる。以下に述べることは長崎奉行「支配」代官の「支配」の内容を明らかにすることでもある。

まず、長崎奉行がどのような形で長崎代官の幕領支配に関与しているのか確認していきたい。江戸から長崎奉行の御用便にのつて送られた幕令は、長崎奉行が受け取り、各方面への触れ流しを行う。長崎市の中へ向けては年番町年寄や会所調役に達し、彼等が各町の乙名らを呼び出して町内に法令を伝えさせた。代官高木支配の「郷方」三カ村やその他支配下村々に対しては奉行所から代官高木に伝えられ、高木から各所への連絡がなされている。地役人の場合、



【表6】〈明和5年〉代官高木の当分預所に関する作成書類とその提出手続

作成書類の種類	伺の手続
御取箇帳・御勘定帳・御林帳	長崎奉行奥書→勘定所
御林木立枯等の際、御払値段伺書	長崎奉行下知
御林木御払代銀勘定組伺、減木伺書	長崎奉行奥書→勘定所
新規運上・小物成伺	長崎奉行下知
新規運上・小物成勘定組伺	長崎奉行奥書→勘定所
御林・御藪開発願に関する伺	長崎奉行奥書→勘定所
野路山・築地・空地開発願に関する伺	長崎奉行衆下知
御林竹木減、地代木代地子銀勘定組・検地高入に関する伺	長崎奉行奥書→勘定所

典拠：越中哲也監修『長崎代官手代控』（長崎文献社、1980年）、149頁。

奉行所から触が達せられる者、代官高木方から達せられる者、町役人から達せられる者などがあつた。なお関東筋他の代官の場合、幕令は勘定所から伝達され、代官から幕領に触れ流される。畿内では、京都町奉行や大坂町奉行が幕領・私領を含め幕令の触れ流しに關与している。長崎代官附幕領では代官が長崎奉行「支配」であるゆえに、畿内と似て幕令の伝達に長崎奉行が介在したのである。<sup>(42)</sup>

反対に、上申においても長崎奉行が介在することがある。例えば勘定所宛てであつても、長崎奉行が奥印を据えた上で江戸に差し立てる形を取る書類があつた。【表6】は明和五年当時の代官高木当分預所幕領村々に関する伺や書類の提出手続きについて定めた史料の内容をまとめたものであるが、御取箇帳など年貢の基本帳面や御林に関する伺は長崎奉行が奥印を行った上で江戸の勘定所に送られていることがわかる。御林木御払値段伺や新規運上・小物成伺、野路山・築地・空地の開発に関する伺は明和期においては長崎奉行の判断で認可が得られることになっている。同じ運上・小物成に関する事項でも勘定組についての伺は勘定所まで書類を届けさせているのと対照的である。この当時勘定所は、上納金額については直接把握しようとしていたが、個別の許認可のレベルの問題は長崎奉行に

任せていたと考えられる。なお、のちになると新規小物成・運上伺も長崎奉行の裏印をへて勘定所に伺が立てられるシステムに変更されている。なぜこのような手続がとられたのか、その手がかりが「史料4」にある。

【史料4】<sup>49</sup>

（前略）右は戸田因幡守元御預所肥前国彼杵郡・高来郡七ヶ村、私当分預所被仰付候処、長崎付式ヶ村御代官所之儀は不依何事長崎奉行衆江相伺、其上御勘定所江奉伺候儀は多分奥書二而差出来候間、此度七ヶ村之儀も、右同様被仰付被下候様仕度奉存候、私儀江戸表二手代も差置不申候間、何二而も長崎奉行衆江差出、御勘定所江御達被下候様仕度奉存候、尤追々取調子申上候様可仕候得共、先書面之趣奉伺候、以上

【史料4】は【表6】のもととなった史料の末尾の部分である。史料では、江戸表に手代を置いていないので長崎奉行に書類を提出し、勘定所へ達してくれるよう依頼しているのだといっている。また、明和二年の史料では、地子・諸運上取立金額に関する伺を江戸勘定所までさし立てていては時間がかかり、取立てが滞るといふ理由から長崎奉行下知にて済ますようになったとしている。<sup>49</sup>江戸詰役人の不在と往復にかかる時間の問題が大きかったといえる。明和期当時は江戸に長崎代官の拝領屋敷は勿論、江戸役所もなく、勘定所へ差し立てる書類はすべて長崎奉行の御用便を利用し、在府長崎奉行の手を借りて提出手続きを行うよりほかなかったものと推測される。

時代が下って享和三年ころにおける地方支配書類の提出手続きは【表7】のようであった。享和三年になるとついに江戸表に長崎代官の手代が置かれることになる。これは、江戸表に御用を取り扱う者を置くようにと指示を受けてのことであった。おそらく勘定所からの要請であったと考えられる。それまで高木はまったく江戸に拠点を持たなかったのだ、地所を借地し、御用屋敷とした。これに伴い、江戸表に対する幕領支配関係書類の提出方法も転換する。在府長崎奉行の手によって勘定所へ提出されていたが長崎奉行の奥印を据える必要のなかった書類について、長崎奉

【表7】〈享和三年〉江戸役所設置後の勘定所への書類提出手続

書類内容	新手續	享和3年以前
高国郡名記帳	(江戸役所) → 勘定所	長崎奉行 (不印) → 勘定所
松浦郡四季米相場書・廻米積取出船届	(江戸役所) → 勘定所	長崎奉行 (不印) → 勘定所
宗門人別証文・切支丹類族死失帳	(長崎奉行所) → 勘定所	
年貢銀皆済届	(江戸役所) → 勘定所、 → 長崎奉行	(長崎奉行) → 勘定所
御取箇帳	(長崎奉行奥印) → (江戸役所) → 勘定所	長崎奉行奥印 → 勘定所
御成箇郷帳・地方勘定組伺	(長崎奉行奥印) → (江戸役所) → 勘定所	長崎奉行奥印 → 勘定所
地方御勘定帳・御証文納札	(長崎奉行奥印) → (江戸役所) → 勘定所	長崎奉行奥印 → 勘定所
村方様子大概帳	(江戸役所) → 勘定所	長崎奉行 (不印) → 勘定所
勤方帳	(江戸役所) → 勘定所	
御米蔵勘定帳・御用物代銀勘定帳・買物帳(御米蔵方)	(長崎奉行奥印) → (江戸役所) → 勘定所	長崎奉行奥印 → 勘定所
村々運上冥加高書付、家別人別差引書	(江戸役所) → 勘定所	長崎奉行 (不印) → 勘定所

典拠：越中哲也監修『長崎代官手代控』（長崎文献社、1980年）、157頁。

行御用便の利用は継続されるものの、在府長崎奉行宅から代官高木の江戸役所に荷物が渡され、江戸役所詰手代が勘定所に直接書類を持参するようになった。長崎奉行の奥印を必要としていた書類も、奥印の後一度代官所役人に戻して、代官所役人から勘定所に提出されるようになる。形式の面においてだが、長崎代官の幕領支配に関する事務を長崎代官が代替して行うことは停止されて、代官所役人がじかにそれを担う形に改められたのである。江戸勘定所に直結する連絡ルートを代官高木はこの時点ではじめて築いたと理解することもある。例外は、宗門人別帳と切支丹類族帳、年貢銀皆済届である。人別の問題は長崎奉行のもとで直接

把握される事項であり、例えば欠落人についても、長崎代官が勘定所へ直接届けることは文政期まで行われなかった。<sup>(45)</sup> 欠落者の跡株相続について直に勘定所に伺を立てるシステムは関東では寛政期に成立していたようだが、代官高木方では文政期になってもなお長崎奉行所に提出していたのである。<sup>(46)</sup> 【表7】で長崎奉行の奥印を必要とする書類を挙げてみると、御取箇帳、御成箇郷帳、地方勘定組伺、地方御勘定帳、御米蔵勘定帳、御用物代銀勘定帳、買物帳などとなる。うち最後の三つは高木氏の御米方、御用物方に関する書類なので除くと、他はみな支配幕領の年貢徴収にからむ重要書類であることが分かる。代官高木支配幕領の年貢収納を長崎奉行が監督するシステムがあったとみることができよう。

このように長崎奉行と長崎代官の間には、関東筋他における勘定奉行と代官との関係に相似的な、あるいは畿内の遠国奉行と代官の関係に似た管轄関係が見出される。しかし享和期頃から長崎代官は、長崎奉行「支配」に置かれながらも、江戸勘定所に直結する連絡システムを形成しつつあり、その性格の変化の過渡期を迎えたといえるのではないだろうか。

## 2. 裁判・警察権に関する管轄

次に、裁判権・警察権における長崎奉行と長崎代官の関係を確かめてゆきたい。寛政一三年段階で代官高木支配松浦郡幕領で発生した公事出入等については【表8】のように取扱の基準が定められていた。公事出入に関する事件はみな長崎奉行に伺を提出し、他支配他領に引合う必要のある事件は奉行に「差出」して吟味をゆだねる。また、代官一支配内公事出入については代官のもとで吟味を行い、長崎奉行へ罪科の伺いを立てるが、奉行から一件差出の指示があれば奉行所へ差し出し、奉行所で吟味・落着を申付けする場合もあった。松浦郡幕領の事件の処理の規定は、平松

【表8】代官高木支配松浦郡幕領における公事出入等取計方法

公事出入の諸形態	取計方法
寺社百姓間、寺社寺社間、寺領百姓出入	長崎奉行へ届、裁許・済口共長崎奉行へ伺
他支配・他領者を相手取る出入	長崎奉行所へ差出
他領より出作百姓年貢未進	相手により取計方長崎奉行所へ伺。咎申付の場合、吟味の上長崎奉行所へ伺。
跡式・養子等出入(代官方へ訴え出た場合)	済口・裁許共長崎奉行所へ伺
地所出入(村境・郡境に拘る分)	吟味以前に勘定所へ伺
地所出入(村境・郡境に拘らない分)	吟味の後、勘定所へ伺
喧嘩口論行倒れ死人変死人(支配所内)	長崎奉行所へ伺、自分落着申渡
人殺・火付・盗賊其外入牢者	長崎奉行所差出(代官牢屋不所持につき)
捨子	長崎奉行所へ届(村養育)、長崎奉行所へ伺(貰人へ差し遣わすとき)
捨物	取計方長崎奉行所へ伺
出火	吟味の上長崎奉行所へ伺

典拠：越中哲也監修『長崎代官手代控』（長崎文献社、1980年）、267頁。

義郎氏の先行研究に整理されている代官と奉行の裁判管轄におおむね合致する。<sup>(47)</sup>しかし長崎の場合、「郷方」三カ村という都市隣接特区を有している上、代官高木氏自身長崎の市政に関与する職務を兼帯していることをあわせ考えなければならない。安政二年に長崎奉行荒尾石見守に対してなされた盗難事件等の届出をまとめた「言上帳」という史料によると<sup>(48)</sup>、寺社が被害者となった盗難事件の場合、郷方に所在する寺社の場合でも寺社方掛の代官には届を出さず、長崎奉行所に直接届を出している。また、地役人や蔵屋敷詰の藩士が被害にあった場合も同様に直接奉行所に届を提出している。なお、その地役人には高木氏の「支配役」も含まれる。さらに、「郷方」三カ村で発生した事件についても、三カ村庄屋が奉行所に直接届を出している。これは、三カ村が市中並の扱いを受けていることと関連するものと考えられる。ただし、三カ村以外の代官高木支配幕領で起こった事件は、一度代官高木のもとに各村役人

から届けられ、改めて高木から奉行所に届がなされることになる。市中・「郷方」で発生した盜難事件等は奉行所が直接把握する体制をとっており、代官が直接把握しうるのは「郷方」以外で発生した事件のみにすぎなかった。なお、代官の手限仕置權は長くごく輕犯罪にのみ行使されていたが、幕末期になると代官の手限取扱權は拡大する。

【史料5】<sup>(49)</sup>

御仕置筋手限申付方之儀ニ付伺書

御仕置筋之儀可入念者勿論ニ候處、御仕置伺書等之取調手間取、自ら惡事いたし候者速ニ御仕置ニも不相成候間、非命ニ死或者退轉之もの等も多く出来、且懲惡之御趣意も薄く成行可申候間、今般手限御仕置申付方之儀木村甲斐守被相伺候、私共おても以来入墨以上相伺、其以下盜賊筋ニ而重敲・敲等可相成品之分其外手鎖過料叱り等手限ニ而申付、尤御仕置当等取調方入念、的例無之紛數分ハ是迄通可相伺、右者板 周防守殿依御差図申達候段、甲斐守印状を以相達候處、私方之儀ハ公事出入吟味物等他之引合有之候分ハ当御奉行所江差出、他之引合無之私一支配内之分ハ不及伺、村預手鎖等申付吟味詰當御奉行所江伺之上落着申渡、尤私一支配内公事出入吟味物ニ而も入牢等不申付候而ハ難決分ハ是亦當御奉行所江差出来候、先前伺済之處天保九戌年私方牢屋取建之義相伺候處、伺之通被仰渡牢屋補理候後、他之引合無之入牢不申付候而不相成分も入牢申付吟味詰、當御奉行所江伺之上落着申渡「」候處、此度前書之通達有之候付以来取計方左ニ奉伺候

一、人殺火附盜賊其外逆罪ニ相□候ものハ、一ト通吟味之上是迄之通當御奉行所江差出候様可仕、尤他支配他領引合無之盜賊筋ニ而重敲・敲等可相成品之分、其外手鎖過料叱り等ハ甲斐守達之通以来手限ニ而申付候様仕度奉存候、勿論御仕置當ノ的例無之紛數分ハ當御奉行所江相伺候様可仕候

右之趣去子年五月伺書差出候處不都合之廉有之取調之上今般奉伺候以上

元治二丑年五月

高木作右衛門印

(長崎奉行)  
服部左衛門佐殿

(長崎奉行)  
御附紙能勢大隅守殿御印

〔左衛門佐在勤中被相伺候書面之趣伺之通可被取計候

寅九月九日下ル

」

元治元年の勘定奉行木村甲斐守からの達書によつて全国幕領一律に、入墨以上の場合は伺を要するが、重敵以下に罪科が相当する場合は代官の手限で仕置までおこなうことをゆるされるようになった。【史料5】にあるように、長崎代官が手限仕置権のみならず手限吟味権まで制限を受けざるを得なかった理由は牢屋にある。長崎代官の管理する牢屋の建設は天保九年まで認められなかった。牢屋の設置を許されなければ重罪人を拘留しておくことができず、結果的に一支配懸かりの事件であつても遠国奉行に刑事事件の吟味を「差出」、すなわちゆだねるよりほかなかつたのである。<sup>(50)</sup> 牢屋の設置が認められることは同時に代官高木氏の手限吟味権の拡大を意味するものと捉えられよう。なお、大坂では長崎よりはやく、安永九年に代官の牢の設置が認められている。大坂の方がより早い段階で遠国奉行(大坂町奉行)の公事出入に関する一元的な管掌体制が緩められ、奉行と代官が一定程度分掌する形態に移行していたと言えよう。<sup>(51)</sup>

次に藩領と長崎市中ならびに代官高木支配幕領との間における出入の取扱について確認したい。【表9】にまとめたように、藩領から長崎市中、代官高木支配幕領に対する本公事以外の金公事出入は長崎奉行所で吟味を行うことになっている。一般に領主を異にする民事訴訟は寺社奉行に出訴することになっていたが、金公事出入程度ならば遠国奉行のもとで吟味を行うことが出来る。本公事の場合でも、長崎市中・代官高木支配所の者が藩領の者を相手として

【表9】藩領と長崎市中井代官高木支配所間の公事出入の扱い

出入の当事者	吟味の場所
御領分（藩領）村々より当地井高木健三郎支配所江相懸り候金公事之出入	長崎奉行所吟味
同断本公事出入	月番寺社奉行へ出訴の積もり
当地市中地続之御領分村々より市中井健三郎支配所江相懸り候諸出入	長崎奉行所にて吟味
市中井健三郎支配所より右同断之御領分村々江相懸り候諸出入	長崎奉行所吟味（相手が武士ではない場合）

典拠：「長」14-67-4「諸往復書類綴」（寛延三年）。

訴訟を起こしたならば、長崎奉行所で吟味を受けることができた。しかし逆に藩領の者が市中井高木支配幕領の者を相手として訴えを起こした場合は、佐賀藩領・大村藩領相給の戸町村など長崎地続きの藩領の例外を除き、同様に長崎奉行所で吟味を受けることが出来ず、寺社奉行所に出訴しなければならなかった。このように両者は対等ではなく、出訴にかかる負担の面で長崎市民・代官高木支配幕領の者に有利な制度となっている<sup>(2)</sup>。また、藩領との公事出入の場面において長崎市中と代官高木支配幕領は同様に扱われていることに留意する必要がある。

以上の検討から、長崎代官の吟味・仕置等裁判権は長崎奉行の広域的管轄権の下部に置かれた形にあり、手限で扱える領域は、罪科の重度においても事件発生場所についても限定されたものであることがわかる。特に「郷方」三カ村に対しては奉行所支配の町方同様の扱いがなされ、代官の支配権は大きく制限を受けた。代官の裁判権は幕末期まで一般に限定されたものであり、関東、東北、北陸の代官の場合、江戸の勘定所に伺を立てることになっていたが、畿内や長崎の場合は異なった。大坂の場合、大坂代官の裁判権は大坂町奉行の管轄下にあり、同様に長崎では長崎代官の裁判権は長崎奉行の傘の下にあった。遠国奉行レベルにおいてほとんどの事件が処理されていた体制が徐々に変えられ、一定程度代官の手限による処理が認められるようになる



のは大坂・長崎共に共通する動向であるが、その分掌が長崎では大坂より遅れた理由は、代官高木氏の身分「支配」と関係のあることと推測される。

### 3. 長崎代官高木氏の身分について

これまで述べてきたように長崎代官高木氏は、限定された場面では勘定奉行所の直接支配を受けるが、おおよそは長崎奉行から様々な指図を受け、役務を遂行していた。長崎奉行の指示を受ける場面でも、長崎奉行が高木の幕領支配に関与する権限を持っているために代官が指示を受けて行動する場合と、高木氏が地役人としての面から長崎奉行の指示を受ける場合と二つの場合があることがわかってきた。そこでそうした入り組んだ「支配」関係のおこる根底にある高木氏の身分の問題についてまとめておきたい。

次の史料は、高木氏が天保期に家督相続を行った際の記録である。

#### 【史料6】<sup>(5)</sup>

私支配身分之義御尋ニ付申上候書付

私身分之儀前々々長崎奉行支配□有之、既ニ家督願等ハ先例之通父作右衛門長崎奉行宛所ニ而長崎ニおみて差  
出置候処、左之通被仰渡候

菊之間

長崎御代官

作右衛門惣領

長崎御代官見習

名代

高木栄太郎

(代官)  
羽倉外記

右跡目被 仰付旨老中列座和泉守申渡□、若年寄中侍座

長崎御代官見習

長崎御代官江

高木栄太郎

右被 仰付旨於御右筆部屋縁頼老中列座和泉守申渡

是者在崎長崎奉行名代之もの「」城江可差出「」違有之ニ付名代罷出「」

長崎御代官

高木栄太郎

其方儀如父時長崎御代官被 仰付候付支配所高七千石被成下、御用物□諸掛り共可為父時之通候、御足高之義

ハ難被及御沙汰候

右者松 和泉守殿被仰渡候間申渡候

辰四月

支配所高之儀者於新番所前溜水 出羽守殿被仰渡候間可被得其意候

辰四月

是者右被仰渡之趣於長崎奉行所書面之通私江申渡候

一、天保三辰年四月二日

近世中後期長崎代官高木氏について―長崎奉行との關係を踏まえて（戸森）

御城江名代之もの可差出旨御達ニ付名代之もの差出候處左之通被仰渡候

高木栄太郎

名代

大草太郎(代官)左衛門

右者支配所高巻万石増地被

仰付候旨於御右筆部屋縁類出羽守殿被仰渡、侍座肥後守殿

四月二日

右之通被仰渡候、身分之儀ハ前々方長崎奉行支配ニ而、増地其外地方御用向ニ付而被仰渡候節ハ御勘定奉行衆直

ニ被仰渡候義ニ御座候

一、御勘定組其外伺共都而長崎奉行支配ニ付、同所奥書ニ而御勘定所江差出来候義ニ御座候

右御尋ニ付申上候以上

天保八酉八月

高木作右衛門

まず注目したいのは、家督願を長崎奉行に提出するということの理解である。同じ代官でも関東筋他の代官の場合、家督に関する願出は勘定奉行所諸組頭衆に提出しており、<sup>(54)</sup>長崎奉行にそれを提出するということからみしても、高木氏が身分的に長崎奉行「支配」のもとにあるということを端的に表していると考えられる。<sup>(55)</sup>このように身分については長崎奉行の「支配」とされていたが、代官として地方御用向に関わる分野においては他の代官同様、勘定奉行支配とみなされていたことが天保八年の文書の引用部分にはつきり示されている。<sup>(56)</sup>代替わりの際は代官役と「郷方」三カ村・「七カ村」支配、御用物方等諸役務のみがまず高木氏の相続の対象とされており、そのほかの幕領の支配については別個に取り扱われ、日にちを改めて手続きがなされている。前者は、代官高木氏の身分、言い換えれば家職とでもいふべきものに付随するものと認識されていたのではないだろうか。後者は、高木氏が近世後期代官一般のよう

な地方支配を行うように性格づけられた反映と捉えられるのではないだろうか。代官が地役人の筆頭として長崎会所配当銀のうちより受用銀を得ているのは、主に前者の面での代官の地付きの職掌に対する付与である。幕臣として代官として幕府より扶持を得ているのは、主に「郷方」三カ村・「七カ村」を含む地方支配を中心とする役務に対する給与であると考えられる。地方御用向については勘定奉行から代官へ直達とされながらも、地方勘定組や伺に関することでは長崎奉行裏書を要することが確認されているように、長崎奉行の「支配」権のもとに、長崎奉行が長崎周辺幕領の年貢収納を監督していたことに注意する必要がある。長崎代官の側から見るとこのような体制は、身分「支配」の面をとつても地方支配の面をとつても、長崎奉行の「支配」と勘定奉行所の支配と両支配の形に置かれていたと見ることが出来るのではないかと思われる。

#### 〈小括〉

長崎代官は長崎奉行「支配」代官であり、奉行に対する伺とその回答、奉行からの達や下知を受けてはじめて管轄幕領の支配が進められる体制となっていた。また、代官の身分についても奉行の「支配」とされ、他の一般の代官とは異なる相続形態をとつた。しかし、寛政期前後からの、幕領政策強化のために長崎代官を勘定所に直結させようという幕府側の意向を受けて、江戸に長崎代官江戸役所が置かれたことなどを契機として、奉行と代官の関係は変化を遂げていった。この結果、幕末期まで長崎代官は長崎奉行「支配」に置かれながらも、その職掌のあり方から見れば、実質的に長崎奉行「支配」と勘定奉行支配の両支配の形とかわつていったのである。

## おわりに

近世中後期代官高木氏は基本的に長崎奉行「支配」代官とされていたが、地方御用向については勘定奉行支配というように二重の「支配」のもとに置かれていた。高木氏は幕臣でありながら一面で地役人としての役を負い、受用銀も得ていたため長崎奉行「支配」とされたと見ることが出来、家の問題や御用物方など地役人として果たす諸職掌について長崎奉行による監督がなされた。地方御用向については勘定奉行支配とされたが、元文期当初からそうではなく幕領支配事務や許認可を長崎奉行が代替することも見られた。また長崎奉行の長崎代官附幕領支配にたいする関与・管轄権は、とくに長崎市中並とされた「郷方」三カ村に関する事項や裁判・警察権の分野で、近世後期まで通じて発揮されていた。しかし、全体的な方向性としては、はじめに挙げた諸研究の結論と同様に、長崎代官も関東筋他の勘定奉行に直属する代官らと性格が近づけられていったと見られる。その変化は、代官が従来と異なり「郷方」三カ村や「長崎七カ村」と呼ばれる長崎地廻り以外の広い地域の管轄を任せられたこと、勘定所への幕領支配関係書類提出方法が長崎奉行を通さない形に変えられていったこと、江戸に代官役所を持ち、江戸勘定所に物理的に直結できる条件が整えられたことが大きく関わっていると思われる。このような変化が起こったのは寛政期から享和期前後と推測されるが、はっきりと段階的な画期を示すことが出来なかった。この点については今後の課題としたい。一方で地役人「支配」や御米方・寺社方掛の面では、長崎代官を長崎奉行の都市統治の協力者として位置づけていく動きも見られた。これは、長崎代官の性格の変化、いうなれば「吏僚化」の方向と相即的なものと捉えることができる。近世初頭以来の、長崎市中支配を町年寄以下の地役人が自治的に担う体制を変えて、江戸から派遣された幕臣らにその主導権を移譲させようという動きが近世中後期におこったと推測され、そのなかで、勘定奉行に直結を遂げつつあり、

地付の代官から「吏僚」代官へと性格を変容させつつあった長崎代官が長崎支配体制に組み込まれていたと考えることができるのである。

註

(1) 西沢淳男「幕領陣屋と代官行政」(岩田書院、一九九八年)。

(2) 久留島浩「近世幕領の行政と組合村」(東京大学出版会、二〇〇二年)。

(3) 村田路入「近世広域支配の研究」(大阪大学出版会、一九九五年)。

(4) 藪田貫「大坂代官の世界」(藪田貫編「近世の畿内と近国」、清文堂、二〇〇二年)。

(5) 西沢氏と藪田氏が代官の日常やその通年の職務のありようを明らかにした素材は同じ代官竹垣直道の日記であり、代官自身の動向をたどれる史料は限定されている。

(6) 柏村哲博「寛政改革と代官行政」(国書刊行会、一九八五年)。

(7) 竹内誠「寛政改革」(岩波講座日本歴史 一二、一九七六)や前掲註6 柏村書などによる。

(8) 国奉行制については高木昭作氏、上方八人衆支配につい

ては朝尾直弘氏、「支配国」論については藪田貫氏らの研究がある。

(9) 村田路入「幕府上方支配機構の再編」(『日本の時代史』一六、吉川弘文館、二〇〇三年、所収)。

(10) 小倉宗「近世中後期の上方位支配—上方幕領をめぐる奉行と代官」(第四二回近世史サマーセミナー報告、二〇〇三年)。

(11) 森永種夫編「長崎代官記録集」(犯科帳刊行会(長崎)、一九六八年)。

(12) 越中哲也監修「長崎代官手代控—金井八郎備考録」(長崎文献社、一九八〇年)。

(13) 森永種夫「幕末の長崎」(岩波新書、一九六六年)。

(14) 「長崎略史」は長崎市役所発行「長崎叢書」三・四(一九二六年)に所収されている。金井俊行著。

(15) 高木作右衛門家は寛永期より町年寄を勤め、寛文二年より御用物役を兼帯するようになった。

(16) 「県令集覧」は、村上直・荒川秀俊編「江戸幕府代官史

料」(吉川弘文館、一九七五年)に翻刻されている。

- (17) 高木忠篤の差控、代官御役御免については長崎県立長崎図書館所蔵文書三一六一―三一四四「明細書」等による。以下、長崎県立長崎図書館所蔵文書を典拠とする場合は「長」と略記する。

- (18) 「長」一四―二九四「明細金銀諸役人附込并加役料帳」による銀高。

- (19) 三カ村の各村高は慶應三年に、長崎村(市中八八七石、郷地一三三〇石の計二二七石余)、浦上山里村(二六〇六石余)、浦上洲村(六六五石余)。

- (20) 「長」一四―七一―一六「御用留」(天保三年)。なお、高木氏の「明細帳」の記述による累算値と合致しない。

- (21) 「長」三一六―一三一―一四四「明細書」。

- (22) 「長」一九―一―一八―一「金井八朗翁備考録」八(上)。代官所ばかりでなく、長崎奉行所や長崎の他の幕府役所の門松献上も「郷方」三カ村がおこなっている。ほかに大坂廻米・江戸廻米されることもあったが、その割合は一定ではないようで、詳細は不明である。

- (24) 「長」一四―七一―一六「御用留」(天保三年)。史料(内のアルファベットは筆者註)。

- (25) 文政五年にはじめて長崎砲術其外御備向御用取扱となり、

十五人扶持を賜った。鉄砲方高木家は四代にわたって幕府より扶持を与えられ、御目見以上末席の席に列せられたが幕臣に召しだされたわけではなかった。砲術を修め、長崎の砲台の守備などに従事した。前掲註14「長崎略史」等による。

- (26) 太田勝也「近世長崎の「地役人」に関する一考察」(「紀要(中央大学文学部、史学科)」二一、一九七六年)、長崎県史編集委員会編「長崎県史 対外交渉編」(吉川弘文館、一九八六年)など。

- (27) 阿蘭陀通詞(片桐一男氏らによる)や唐通事(林陸朗氏ら)などの研究に代表される。

- (28) 「長」一四―七一―一三「御用留」他。

- (29) 「長」一九―一―一七―二「金井八朗翁備考録」七(下)。

- (30) 「長」一四―二九四等による。後に述べる御米方手代も同様。御用物方手代の受用銀額は一人銀七一五匁。

- (31) 「長」一九―一―一四―二「金井八朗翁備考録」四(中)。

- (32) 以下、「長」一一―一二「寺社方一件」(天保二年)等による。

- (33) この時期より江戸からの幕府役人の派遣が増加する。明

和元年には御勘定と普請役を長崎に在勤させるようになり、天明六年には長崎村岩原郷に目付屋敷を設け、目付を在勤させるようになった。寛政五年には長崎奉行手附出役を置き、江戸からさし下した手附出役に奉行所内の事務を執らせるようになる。このように江戸派遣役人を長崎に置き、江戸方の意思を反映させようとしていくのがこの時期であり、町年寄ではなく代官に寺社や御蔵の管理を任せるのもこの流れに対応するものであると考えられている。それは逆にとらえれば、町年寄の権限を制限していくこうとする動向でもあるといえる。

(34) 「長」一九一一—一六—三「金井八朗翁備考録」六(下)。

(35) 「長」一九一一—一六—三「金井八朗翁備考録」六(下)。いわば蔵奉行に相当する役割を代官が兼職していたのではないかと考えている。なお大坂蔵奉行は元禄期から大坂町奉行の支配であったが、寛保三年に勘定奉行支配となつてゐる。京都蔵奉行は寛政二年に勘定奉行支配に変わつてゐる。なお、文政元年のある史料によると、大津・浦賀・駿府・甲府・日光今市・長崎の各御蔵に置かれた掛代官は、勘定所のもと一括に取り扱われている。(36) この拝借米の代銀は翌年の七月、長崎会所によつて取り

立てられた。「長」一四—七—一—三による。

(37) 「長」一四—七—一—三「御用留」(文化四年)。ただし、地子銀の徴収をまったく免除されている内町一七カ町にまで困穀の取立を行うことを求めることは出来なかつた。長崎奉行の市中支配との兼ね合いもあり、代官高木も從來地子銀徴収の場面で関与していない町にまで支配幕領同様のやり方を適用させることは難しかったと考えられよう。

(38) 前掲註26「長崎県史 対外交渉編」による。

(39) 安永五年の史料に「勿論市中之儀も人家以上ハ町年寄掛ニ御座候得共、地所之儀ハ私御代官所内之儀ニ御座候」との文言がある。前掲註12「長崎代官手代控」、二〇五頁。

(40) 前掲註12「長崎代官手代控」、二〇六頁。

(41) 「長」一四—七—一—二「御用留」(天保一五年)。

(42) ただし、私領に対する幕令の触れ流しに長崎奉行が関与していたかどうかについては確認できない。

(43) 前掲註12「長崎代官手代控」、一五一頁。

(44) 前掲註12「長崎代官手代控」、一四八頁。

(45) 京都代官支配幕領、大坂代官支配幕領でも同様に人別に關する書類は管轄の遠国奉行に提出している。



(46) 前掲註12「長崎代官手代控」、二八六頁。

(47) 平松義郎「近世刑事訴訟法の研究」(創文社、一九六〇年)。

(48) 「長」一四—三四—一一。

(49) 「長」一九—一一—八—一「金井八朗翁備考録」八(上)。

(50) 代官高木が自分の牢屋を持たなかったのは、もともと支配地域が狭く、吟味を要する事件の件数が少なかったという事情もある。ところが、肥後国天草郡幕領を管轄するようにになると、人口の多い地域でもあり、事件も多く発生したので牢屋を建設する必要性に迫られたのである。前掲註12「長崎代官手代控」二七四頁。

(51) 前掲註10小倉宗「近世中後期の上方支配」における分析と比較しての位置づけである。

(52) 塚本学「山田奉行の裁許権」(『三重大史学』二、二〇〇二年)にも、他領他支配引合の事件の管轄について奉行と領主の関係は等しくなく、山田奉行の優位性が存在したことが指摘されている。

(53) 「長」一九—一一—七—一「金井八朗翁備考録」七(上)。

(54) 東京大学法学部法制史資料室所蔵文書三四七四「代官諸

控」による。

(55) なお、他の例では京都代官角倉氏や木村宗右衛門も京都町奉行「支配」であった。近世後期のこれらの代官との実際面での比較は今後の課題としたい。

(56) ただし、元文期の高木氏代官就役当初から地方支配について勘定奉行支配とされていたかという疑問である。ある段階(勘定所に直結する連絡通路が開かれた寛政期から享和期前後と推測している)に代官の職掌についてのみ勘定奉行が直接「支配」する形に変更されたのではないかと考えている。

